

Title	序
Sub Title	
Author	大石, 裕(Oishi, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2013
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.86, No.7 (2013. 7) ,p.v- vii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	生田正輝先生追悼論文集
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20130728--004">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20130728--004</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 序

二〇一二年（平成二四年）五月七日、元法学部長・常任理事の生田正輝名誉教授が八九歳の生涯を終えられた。生田先生は、一九二三年（大正一二年）二月六日、兵庫県丹波市柏原町でお生まれになった。慶應義塾大学法学部政治学科に入学後、学徒動員で戦地に赴かれたこともあり、卒業は一九四七年九月であった。卒業後ただちに法学部助手に任用された。学部時代は米山桂三先生の下で、社会学、世論、マス・コミュニケーション論などを学ばれていた。

生田先生は法学部政治学科でマス・コミュニケーション論を担当することになったが、一九四六年に米山先生主導の下で新聞研究室が開設されたこともあり（一九六一年に新聞研究所に改組）、この研究室（研究所）の運営にも深く関わることとなった。一九五一年に助教、一九五七年に教授に昇進され、一九六〇年から六一年にかけてハーバード大学で訪問研究員として研鑽を積まれた。

この間、生田先生は、マス・コミュニケーション研究を精力的に進められ、『マス・コミュニケーションの諸問題』（一九五七年）、『マス・コミュニケーションの研究』（一九六八年）といった、まさに先駆的な著作を上梓された。それにより、当研究領域における先生の評価は揺るぎないものとなり、慶應義塾のみならず日本のマス・コミュニケーション研究の確固たる基盤が築かれたと言っても決して過言ではない。

ところが、生田先生が研究に専念できる日はそう長く続かなかった。一九六五年にはすでに体育会理事に就任

されていたが、六九年に常任理事、七三年に新聞研究所所長、七七年に法学部長・大学院法学研究科委員長と  
いった要職に次々と就かれるようになったからである。特に常任理事の時代には、学園紛争の処理にあたり、多  
くのエネルギーを費やされたと聞く。

その後、一九八三年には常磐大学人間科学部の創設のため同大学人間科学部長、常磐学園理事として招かれ、  
転籍されることになった。転籍中も客員教授として、学部・大学院の授業を担当されていたので、慶應義塾を退  
職されたのは一九八七年であり、同年名誉教授になられた。常磐大学での勤務は継続され、一九九三年には同大  
学大学院教授、同大学院人間科学研究科長に就任された。

生田先生は学会など様々な社会的活動を通して多くの貢献をされた。日本新聞学会（現日本マス・コミュニケー  
ション学会）会長を務められ、また産経新聞紙上で一九七七年から八六年まで一〇年もの長きにわたり「マスコ  
ミ論談」を執筆され、まさに新聞のみならずマス・メディア全般に対する貴重なご意見番としての役割を果たさ  
れた。

さらに、一九八〇年代になって「ニューメディア」ブームが到来し、関連する省庁や業界、有識者などともに  
財団法人情報通信学会の立ち上げにも深く関わり、その会長も務められた。先生の関心とお仕事は、次第に情  
報通信政策へと広がり、国際会議を主導するなど、メディアの国際化という潮流の中でやはり重責を担うことと  
なった。そうした実績から、郵政省（当時）電波監理審議会会長に就かれ、実際の政策・政治の場で活躍する機  
会も増大した。それらの功績が認められ、二〇〇〇年に勲二等瑞宝章を受章された。

生田先生は、教育者としてもその力を十分に発揮された。慶應義塾に限ってみても、鶴木眞先生（法学部）、  
霜野壽亮先生（同）、伊藤陽一先生（新聞研究所、総合政策学部）といった後進を育成された。それ以外の大学で  
も、先生の教えを受けた数多くの研究者が現在もなお活躍中である。また、マスコミ業界では、生田ゼミ出身者、

あるいは新聞研究所で先生のご指導を受けた塾員も実に数多くいる。木村太郎氏（ジャーナリスト）、滝鼻卓雄氏（讀賣新聞社元社長・会長）、坂東愛彦氏（朝日新聞社元専務）、喜多恒雄氏（日本経済新聞社社長）、瀬下英雄氏（元NHK記者、綱町三田会代表幹事）などである。また、江國滋氏（エッセイスト）、清原慶子氏（東京都三鷹市長・元東京工科大学メディア学部長）も先生のご指導を受けた方々である。

私は生田先生のいわば孫弟子にあたる。先生のご自宅や軽井沢の別荘にお邪魔し、楽しいひと時を過ごさせていただいたこともある。そうした時の先生は、ウイスキーのグラスをかたむけながら、実に楽しそうに語られていた。研究についてはもちろんのこと、戦争体験や大好きなゴルフの話などをよくされていた。

二〇一一年二月、生田先生をお慕いする方々が集って「米寿をお祝いする会」が銀座で催された。先生は上機嫌で、楽しそうに過ごされていた。それからひと月も経たないうちに、先生がご自宅で倒られたという知らせが届いた。信じられない気持ちであった。何度かお見舞いにかがった。ベッドの脇に一冊のノートが置かれ、そこにはお見舞された方々の暖かい言葉がつけられていた。一年余りの闘病生活の後、先生は旅立たれた。

二〇一二年六月、「生田正輝先生を偲ぶ会」が生田家の主催で開催された。浜田純一東京大学総長（当時、日本マス・コミュニケーション学会会長）、そして清家篤慶應義塾長をはじめ多くの方々のご参列をいただいた。会場の片隅で、私も先生の在りし日のお姿を思い出していた。

生田先生、長い間のご指導、本当にありがとうございます。安らかにお眠りください。

二〇一三年（平成二五年）七月